

子不語(孔子が語らなかった)の中国文化

—中国的な外来文化との融合方法—

東日本国際大学経済情報学部准教授

宮岸 雄介

孔子は怪力乱神を語らなかったという。また、孔子は死についても言及を避けた。『論語』のこうした章句から、中国人のきわめて現実主義的な思考様式の一面を看取することができる。しかし、後世の中国の人々の好奇心は、儒家の開祖である孔子のこうした現実主義的な態度を遵守することに満足してきたのであろうか。

確かに、人智では計り知れない怪異なこと、死後の世界という問題を禁忌(タブー)視してきた現実主義的発想も、中国人の合理的性格の一面を示す指標ではある。しかし、中国の思想史では、現実主義の立場に立ちながらも、飽くなき好奇心から未知なるものへの追求の軌跡が認められる。中国の文化を理解するためには、おもに儒家が説いてきた建前だけではなく、儒家の立場に立ちながらも、未知なるものを希求してきた文化の深層を明らかにすることが必要であると思う。

中国の思想は、乱世を経るたびに世界の安定を志向して豊かな思想的基盤が醸造されてきた。その第一回目は、いわゆる春秋戦国時代(紀元前六世紀から二世紀)で、諸子百家という大別して九家の思想学派が形成された。中国では、これまで全土を統一する王朝が現れず、思想家たちは国家論、政治論を唱えて遊説した。その結果、儒家が漢代の国家イデオロギーとなり、中国人の精神の支柱となっていくことは歴史が饒舌に語る場所である。

第二回目の思想界の開化は、後漢末から始まる六朝時代(二世紀から五世紀)である。この時代は、小説『三国演義』で有名な三国時代を皮切りに、中国が南北に三百年近くも分裂したままであったという、長期にわたる乱世であった。六朝時代は、王朝が短期のうちに変わるため戦乱も絶えず、人の死というものが、最も身近なものとして意識された時代であったと思われる。こうした時代背景が手伝って、仏教という外来宗教も、この時期に中国全土に広まっていった。おそらく中国人は、「無常」や「輪廻」という、死後の世界を闡明(せんめい)する未知の発想に、この時初めて触れたのであろう。そもそも中華思想という自国の文化に自信を抱く中国では、外来思想が入ってきて、そのまま無批判のうちに取り入れることは絶対にしない。以後、仏教が中国という風土に根付くまでには、夷夏論争などが過激に展開され、仏教自体も中国化していくという変質も余儀なくされるのである。

仏教では「断髪」をして「出家」をし、死後は「火葬」する。しかし、儒教の理念からすると、父母から頂いた体を毀損すること、すなわちみだりに丸坊主にしたり死後焼いてしまうということはとうてい容認できることではない。また、儒学は「家」を重んじ、親孝行することを美德としているのに、「出家」してしまうということは明らかにその教義に反する。

そこで、仏教が中国に入る際、経典のねつ造が行われた。これは現存する、いわゆる偽経と称される中国撰述経典がそれにあたる。もともと仏教に無かった発想を、経典を偽造することで、仏教にもあったものとしてしまったのである。その代表が、「父母恩重経(ぶもおんじゅうきょう)」と「孟蘭盆経(うらぼんきょう)」である。仏典が漢訳されるなかで、この二つもあたかも翻訳された仏典であるかのごとく偽造されて今日に伝わり、皮肉なことに、中国人には一番親しみがある仏典になってしまっている。前者は父母を大切に孝養を尽くすべきことが説かれ、後者は目蓮尊者が餓鬼道に落ちた亡母を救い出す話が書かれている。つまり、これらは儒学の「孝」を顕彰する内容で、明らかに仏教が中国化した姿が見い出せる。

「孟蘭盆経」がもとになり、亡者を七月に祀る行事が生まれ、日本も「お盆」として、先祖

の英霊を供養する営みを今日まで続けている。「お盆」は日本ではお寺が執り行うものの、インド伝来の仏教行事ではなく、まさに中国人が作り出した儒教の精神に由来するものなのである。

中国思想史を読み解くと、孔子が語らなかったことも、後世の中国人は、豊かな想像力によって、時には外来思想の原典まで改ざんしてまで中国流の物語を創作してきたことがわかる。

とかく世界を賑わせる現代中国の問題も、孔子の語らなかった中国人の思考様式から見直してみると、新たな解釈ができそうである。

(本コラムは本年度秋開催予定のいわきヒューマンカレッジ開講予定学部の内容と一部連動しています。)